

枕木を支えているバラスト

(年取るということ日誌から)

CL教育研究会 遠間美保子 amhotm@gmail.com http://docl.jp



2008/6/28

白い夏シャツにカバンを提げた高校生男子生徒が三、四人で下校途中、

「ブリジストンは……」

「日本人の考えなんて、その程度だよ」

「しょせん一」

「ダンロップタイヤはどう…」

仕事の経験もなく、海外どころか、社会に出たこともない若造たちがビジネスマンのようないっばしの口を利いているのが、おかしく、思わず顔を見るとまだ童顔が残っていた。今から社会に向いている言葉だけでも頼もしい。

6/30


長年の友人は95歳を過ぎた元気なお父さまと同居している。

「足がほんのちょっとでも痛いとは日にも外に出ないし、新聞を取りにも行かないのよ。お天気がいいから『外は気持ちいいですよ』と軽く勧めても、『足が治ってからだっ!』。CLとは逆のやり方ばかり…」とぼやく。午後ウォーキングに出て、近隣の一軒家にさしかかると、玄関のドアから高齢の男性が出てきて、数段の階段をよたよたと降り始めた。危ないな一だいじょうぶかしらと門の外から見ていると、最後の段で足がもつれたのか、つんのめりそうになって、郵便受けのある門ペイに両手をつけたと同時に玄関のドアが開いて「危ないでしょっ!私がいづも取ってあげてるでしょ!」「危ないからやめてっ!」「何度も言ってるでしょう」と怒った口調の大きな声で中年の女性(たぶんお嫁さん)が出てきて男性を支えた。思うように行動がままならないお父さんは退屈で、夕刊が来るのは楽しみの一つで、郵便受けに配達される瞬間を待ちに待っているのかもしれない。そしてまた、世話をかける嫁さんにせめて夕刊ぐらいは自分で取ろうと考えて、少しは役立とうとするが体は言うことを聞いてくれない。結局は嫁さんに余計な手をかけさせてしまう。などと想像しながら、友人の父親への希望とまったく逆な場面に出くわし、どちらにしても世話をされる側もする側もそれぞれの努力が求められご苦労なことだ。

8/1

カンカン照りの猛暑の午後3時前後、七人ほどの黒く日焼けした老若男性らが京成線の線路上で枕木を支えている碎石砂利(バラスト)を入れ替える作業をしている。砂利といっても拳大で、シャベルで砂利を掘り返すのはひと掬(すく)いでも、屈強な男性でも相当な力仕事に違いない。そこで、シャベルにしっかりとロープがつけられ、一人がロープの先を持ち、もう一人がシャベルを持って、砂利を掬うタイミングに合わせて、ロープを引く。二人の力が重いシャベルを持ち上げる。碎石の入ったプラスチックの籠は数十個もあって、この作業は夕方まで続き、この作業員は一定の区間を担当するのだろうが、線路はどこまでも続いているから数日間、炎天下でこの作業をするに違いない。

電車に乗ったとき、だれのおかげで目的地の駅に着くことができたか、事実の詳細を考察するが、このように砂利の整備をしていただくとは知らなかった。多くの人に乗ったあの大きな重量のある電車は、二本の鉄の線路に支えられて走れる。そのレールを枕木が支え、枕木をバラストが支えている。あの碎石砂利はどこから運ばれたのか。しっかりとしたトラックが運んでくれたに違いない。思わず口に出る「暑い」の愚痴は、この光景のおかげで引っ込んだ。(千葉県市川市 CLインストラクター)

 [目次へ戻る](#)